新・面瀬の昔ばなし　その六

上沢（猫渕）地区

「猫渕由来、猫石と化け猫」

「松岩百話」、丸森謙氏「郷土むかしむかし」から

「猫神」と聞くと、猫の性格から何かたたりでもあったような感覚になる。面瀬地区の「猫渕」という名前の土地も当然猫との関係が深いようだ。地名に「猫」がつくとは実に珍しい。地名辞典でもなかなかない。猫といえばネズミを連想する。古来日本では、絹織物の原料として蚕（かいこ）を大切に育ててきた。これをネズミがよくねらうので、農家では猫を飼ってネズミよけにしてきた。大切な蚕を守ってくれた猫に、感謝の気持ちを表すため、各地に「猫神」とか「猫塚」というものが石碑としてあるらしい。猫渕の猫神様もそのようなことで建立されたものなのかもしれない。上沢地区にはこんな話もある。

実は、面瀬の上沢には化け猫つまり怪猫がすみついていて人々に危害を加えたとのことである。何と人間を食べてしまって、その食べた人間に化けて生活していたというのだ。こんなことを耳にすると、猫にはやっぱりこわいところがあって、だから猫神として恐れられるのかとも考えてしまう。また、けなげにも、人間のために尽くして命を落とした猫もいた。この猫のために猫神様にしたとも言い伝えられている。さて、どれからお話しましょうか。

かなりの昔から猫渕地区にあった猫神様で、雄雌の猫石が二こ祭られたことからお話を始めましょう。この雌石は明治の洪水で流されて行方不明。平成の今は雄猫石しかありませんけどね。

今から三百年前のことです。江戸時代というものが始まって間もなくの頃でありました。今の大萱地区に、やはり金掘りのために遠く筑紫（九州）の国から訪れた職人がおりました。この面瀬川沿いでは、ほんとうにたくさん金がとれました。この男はよく金をとると村で評判になりました。

あるときです。いつものように男は、玄翁（げんのう：かなづちのでかいもの）と石のみをもって、金を含んだ石がたくさんとれる洞窟に入りこみました。金がたくさんとれるだけあって、穴は本当に深いのです。松明で照らしても、奥まではなかなか見えないほどです。ところがこの日は、松明の灯りがとどかないはずの洞窟の奥の奥から、黄色っぽいような緑色のようなものが動いて見えるのです。しかも音まで聞こえます。

「ゴロゴロ、ゴロゴロ、ぎゃわん、ぎゃーわん。」

男の体に鮫肌がたちました。男の太い腕の毛は逆立ちました。言葉にできない恐ろしさ。でも、もしかしたら金よりも価値のあるものが奥の奥にあるのかもしれない。男は欲を出しました。松明を照らしながらそろりそろりと奥に進みました。途中で松明が燃えつきてしまい、足下が見えなくなりました。男は洞窟の露で足をすべらせて転びました。しこたま頭を打ったので、気を失ってしまいました。男は夢ともつかぬ不思議を見ました。夢の中で、さっきの光が二匹の猫の姿となり、男にこう告げたのです。

「ニャオ、金掘りさん。われらは洞窟毒気（毒ガス）試しの猫の霊である。人間どもは金をめあてに、われら猫を洞窟の先に送り、毒気の有りなしを確かめたもの。われら雄雌の猫は洞窟の毒気で死んだのです。我らの魂を法要し昇天させたまえ。」

気絶していた男の頬に洞窟の露が一つ二つ落ちた。その冷たさで男は目を覚ました。目の前には二つの岩石があった。松明がなくてもちゃんと見えたのだから不思議である。

男は、直ちに金掘りの頭領にこのことを話した。仏法にて供養し、この二つの石を、昔からあった猫神様に祭ったのです。

この石は、猫のことについて不思議な利益をくれる力がありました。猫のためなら、どんな願いでも聞き届けてくれるということで評判になりました。だから、この石をお参りする人が絶えなかったそうです。特に、養蚕農家では、猫がいなくなって困った時にこの石をお参りすると、どこからか、いなくなったその家の飼い猫が現れたとのことです。

さて、二つめのお話は、ちょっと怖いですよ。小さい子は読まない方がいいかも。お母さんと相談してから読んでね。

「神山川事件」とでもいいましょうか。この事件は、上沢猫渕にすむ怪猫のしわざということで伝わっています。

大昔のことです。気仙沼の大金持ちが京の都に遊山に行きました。そのときに有名な仏師（仏像を彫る職人）に観音像を依頼したのです。観音像は京都でできあがりました。これを運んできたのが諸国行脚の六部です。「六部」というのは仏教修行僧のことです。観音像は六部の背に負われて、気仙沼の町の入り口、神山川にさしかかりました。その時のことです。えもいわれぬ妖気がただよい、六部は大きな怪猫に襲いかかられました。六部は、修行の極意、錫杖での護身術をつかい、その大きな怪猫

の額をしこたまなぐりつけました。さしもの怪猫もあまりの衝撃に「ギャー」と悲鳴をあげて気仙沼の町の方に逃げていったのです。

六部は足を進め、依頼主である気仙沼 八日町の大金持ちの家を訪ね当てました。観音像を差し出すと、主人の様子が何やらおかしいのです。尋ねると、

「ただいま、私の母が額に大傷を負いました。実家の松崎の帰りに、神山橋のたもとで転んだのです。それで家族の者が右往左往しています。でも母は寝ていれば治るからと言って、家人を部屋に入れないのです。」

と困り顔です。六部は胸騒ぎを覚えました。家人を外に出し、老婆の寝ている部屋に近づきました。ふすまをそっと開けると、どうでしょう。神山川のあの怪猫です。体を布団の中に入れて、足をなめながら、さっきの大傷をこすっているではありませんか。六部は外にいる家人に尋ねました。

「観音様の思し召しでありましょうか。今布団に入っているのは母上にあらず、化け猫でござる。たまたまあなたの家を訪ね、この妖怪をこらしめよとのことに相違なし。このごろ母上に変わったことなどありませぬか。」

すると主人は

「そう言われると、この 一月ほど、母は今までめったに 口にしなかった魚を好んでよく食べるようになりました。年を取ればそういうものかと気にもとめていませんでしたが…。」

六部の真意をはかりかねたように答えました。六部は、さもあらんという顔をしました。そして、家の中にもどり、錫杖を構えると、老婆が寝ている座敷のふすまを勢いよく開けて、中に入りました。急な入室で、猫は老婆に化身することかなわず、怪猫の姿のまま六部に襲いかかりました。人間と妖怪の死闘は 一時ほども続いたでしょうか。とうとう化け猫は、六部の錫杖のもと、もんどり打って血反吐を吐き、息絶えたのです。

その後、家中を探すと、屋根裏から怪猫に無惨にいたぶられた主人の実の母の死体が発見されました。怪猫は老婆をかみ殺し、何食わぬ顔で老婆になりすまして家人とくらしていたのです。観音像がこの家に来ると知って、さはさせじと神山橋付近で六部を待ち伏せしていたのでしょうね。この話は、猫は猫でも人間を襲うものもあるという、猫の恐ろしさを伝える物語でした。

最後のお話は、何といいましょうか、人間に役立とうとする猫が、畜生の性のために非業の最期をとげるお話です。前にも述べましたが、大昔は松崎村の山奥の農村で養蚕が大変に盛んだったのです。ですから蚕を狙うネズミの退治に猫を飼うのが一番でした。猫の「ニャーオ」の声　一つで、ネズミ　一匹寄りつかなくなるのですから。

大萱のこの農家でも、猫は家族同様でした。特に、かか様はこの猫を大変に可愛がっていました。猫も、かか様が来ると、のどをゴロゴロ鳴らし、目を細めるのです。夜はかか様の布団の中にもぐり込みます。寒い冬は、こうしてかか様を温めてくれたのです。かか様は、この猫をますます可愛がりました。

養蚕が始まって何回目かの取り入れの時です。その日は梅雨明けの近い蒸し暑い日で、主人もかか様も目が開けられないくらいたくさん汗をかいて作業をしていました。と、近くにいたこの猫が、いきなり、目をむいて、口をあけ、牙をむき、かか様に

「ゴロニャーオー」

と襲いかかったのです。かか様は手や足にかじり付いてくる猫を払うことができず、大声をあげました。その声を聞きつけて、主人が蚕場に上がって来ました。その様子を見るなり主人は、

「この畜生猫めがぁ。」

と言って、持っていた桑切鎌で、猫の首をスパッと切り払ってしまいました。

しかしどうでしょう。息を切らして猫を見つめていた主人の頭上に何か生き物の気配を感じます。見上げると、大きな光る目、ぺろぺろ出し入れする二つに分かれた長い舌。二階の蚕場の天井の梁には、見たこともないほどの大蛇がいて、主人をにらみつけていたのです。主人とかか様は、家の外に逃げました。それから、近所の者と一緒に何とか大蛇を退治しました。これまでに見たこともないような大蛇でした。人間ほどもある頭、杉の木ほどもある胴体、鱗は赤子の手のひらほどもあったといいます。

こうして、恩義あるかか様が大蛇の災難に気づくようにと、あの猫がかか様に襲いかかったのだと、二人は気づいたのです。畜生とはいえ、何とけなげな心でしょうか。この猫を祭って川の近くに猫神様を建立したそうです。

これら三つのお話からも、面瀬「猫渕」がいかに猫と関係深いかが知れます。いずれにせよ動物は、心もあり恩義も感じ、また逆に、欲深く、人間を襲うこともあるということをこころしなければなりませんね。

↑猫石（かつては雌雄二対だった
明治の洪水で雌石は行方不明
現在は雄石だけが祭られている）
手前に見える木は鳥居の跡